

「チャレンジ・キャンプ」実践報告

2年次会 吉備 豊 工藤泰三 塗田佳枝 本弓康之
今野良祐 金森雄大 田中友紀子 平田佳弘
安達昌宏

2年次以降の学校生活を円滑にし、生徒の新たな人間関係を形成することを目的に、「チャレンジ・キャンプ」を実施した。このキャンプは、生徒間の信頼関係や教員との信頼関係を築き、さらに生徒へ達成感・成就感を感じさせることによって、生徒に高校生活をより積極的に取り組ませることを目的に実施した。

キーワード：チャレンジ・キャンプ 信頼関係 達成感 成就感

1. はじめに

導入期指導として本校では入学直後に「コミュニケーション・キャンプ」（以下「コミキャン」と称する）を毎年継続的に実施している。このコミキャンは、入学直後から3泊4日の宿泊を伴う野外活動プログラムで、総合学科である本校の学びを理解させることや学校生活を円滑に行うことを目的としている。

このコミキャンは、生徒の満足度が毎年高く、また、外部評価によってこの本校の野外活動プログラムが学校生活導入期において有効であることが確認されている。

しかし、本校の生徒の様子を見ると、このコミキャンでの印象が非常に強く、その後の学校生活でもこのコミキャンで培われた人間関係を生徒が重視している傾向がみられている。そのため、2年次で行うクラス替えによる新たなクラス内での人間関係の形成や2年次から始まる生徒個人が選択した選択授業での人間関係の形成等において、この傾向が強く影響し、高校生活での新たな人間関係の形成の妨げになっている傾向がある。

また、総合学科である本校では、1年次の必修修科目「産業社会と人間・産業理解」の授業等によって、自己を見つめ、さらに自分の将来を見据えた2年次からの授業を生徒個人が選択する取り組みを行っている。この1年次に生徒個人が授業を選択した授業が本当に自分の進路実現に近づく選択であったかどうか、生徒は不安や迷いを実際に選択授業が始まる2年次に持つ傾向がある。

さらに、担当する教員の印象として、現在の生徒達は、これまで達成感や成就感を感じる体験を生徒自身が体験した経験やその体験を生徒間で共有した経験が少ないため、不安や迷いを解決するために必要な生徒自身の自信や体験を共有したことで生じる信頼関係が弱いのではな

いかと考えていた。

そこで、本校での2年次以降の学校生活を円滑にし、また、生徒間の新たな人間関係を築く新たなコミュニケーション能力の向上を目的に、新たな体験型プログラム（チャレンジ・キャンプ）を実施した。

2. チャレンジ・キャンプの目標

このキャンプを計画するにあたり、担当する教員間で生徒の現状を踏まえながら、チャレンジ・キャンプに期待する効果として次のようなことを目標とした。

●「不安」を「自信」に変えさせる

生徒の持つクラス替えによる新たな人間関係に対する不安や選択授業に対する迷い、将来に対する不安を生徒個人や集団としての達成感・成就感を得ることによって生徒個人の自信に変える。また、生徒自身が大人の助けも必要なことを知り、生徒に安心感を与える。

●肉体的・精神的な負荷をかける

仲間の力を自然に借りながら、人は一人では生きていけないことを身体で理解させ、生徒同士で自然に手がさしのべられる環境を作る。生徒に達成感を感じさせ、自己肯定感と未来志向型の力を養う。

●「楽しかった」だけの反応ではなく、そこで終わらないプログラムを目指す

生徒に楽しさを味あわせ、すてきな思い出を共感できる仲間づくりをさせる。

集団としての達成感や成就感を持ったことが少ない生徒に対して、大人との信頼関係を築き、大人に助言を求める態度を身に付けさせる。また、表面上ではなく内面から徐々にこみ上げてくる達成感を目指す。

3. プログラム構成

チャレンジ・キャンプの目標を効果的に実施するため、次のようなプログラムを構成した。

- ・生徒の印象が強く残るコミキャンで利用した黒姫高原で実施する。
- ・生徒に肉体的な負荷のかかる登山（黒姫山）を行う。黒姫山登山について、信州自然大学校に協力、助言を求める。
- ・天候が安定し黒姫山登山が可能で、夏休み直前の7月中旬に実施する。
- ・生徒への精神的な負荷をかけるため、黒姫山の登山道の登りと下りの道をかえ、より長い距離を歩かせる。
- ・黒姫山への生徒の興味を高めるために、黒姫山の自然について（中村学校長による）講義を行う。
- ・生徒に楽しさを感じさせるため、キャンプファイヤーを行う。
- ・生徒への肉体的・精神的負荷を高めるため、できるだけ生徒の自由時間を減らす。

	7/18	7/19	7/20
午前		黒姫山登山	昼食づくり 閉校式
午後	開校式 長縄跳び		
夜	講義	キャンプ ファイヤー	

表1 チャレンジ・キャンプ日程

4. アンケート結果

キャンプの満足度について、生徒のキャンプに対する満足度の長期間の変化を調べることを目的に、キャンプ直後、2学期開始直後（9月）、3学期末（2月）にキャンプに参加した生徒（2年次生：157名）を対象に同じアンケート項目で調査した。

このアンケート結果から、生徒の満足度は調査時期に関係なく、どの時期でも同じような一定の傾向を示している。この傾向は、このキャンプが生徒に与えた印象が持続的に強く残っていることを示しており、これは、このキャンプで期待した、表面上ではなく内面から徐々にこみ上げてくる達成感を生徒が感じる効果を十分期待で

きる成果が現れていると考えられる。

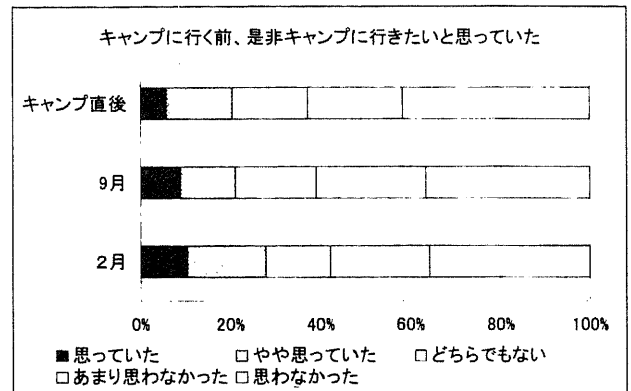


図1 アンケート結果①

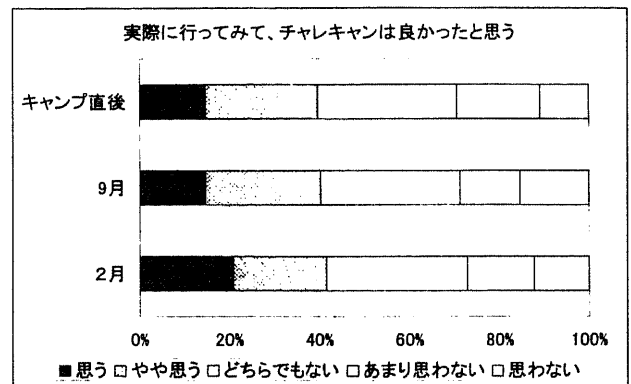


図2 アンケート結果②

アンケート結果①によると、キャンプ直前に生徒にプキャンプのプログラム内容を提示したこと、また、体力的に負荷のかかる黒姫山に登山することなどを事前に説明したため、このキャンプに対する生徒の意欲の差がこのアンケート結果に反映されている。しかし、キャンプに行ってみての感想とキャンプ前の印象とを比較すると、全体的にキャンプ自体の満足度が向上していることから、生徒はこのキャンプに満足感を得ていることが推測される。

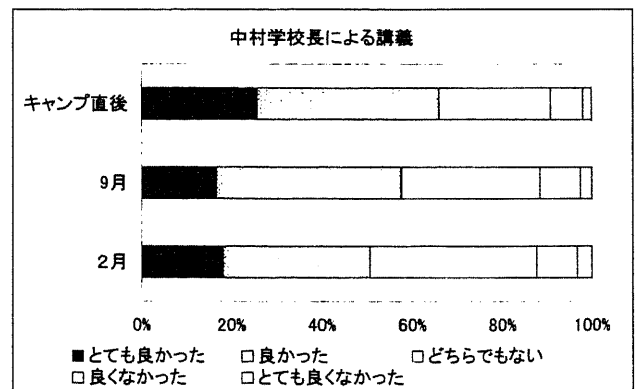


図3 アンケート結果③

実施したプログラム満足度を比較すると、アンケート結果③の中村中学校長による講義の満足度が他のアンケート項目に比べて比較的高い。これは、講義内容が登山する黒姫山の植生等についてだったために生徒の関心が高く、また、生徒自身が登山しているときにその講義内容を生徒自身で確かめることができたため生徒の満足度が高く現れたと考えられる。

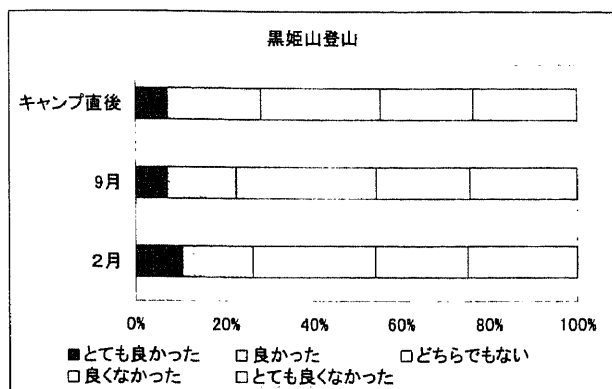


図4 アンケート結果④

また、アンケート結果④の黒姫山登山の満足度は比較的低い傾向にある。これは、登山が生徒にとって肉体的に負荷のかかるものだったことや下山時に生徒が歩く距離を長くしたために生徒への精神的な負荷がかかったことなどが影響していると考えられる。

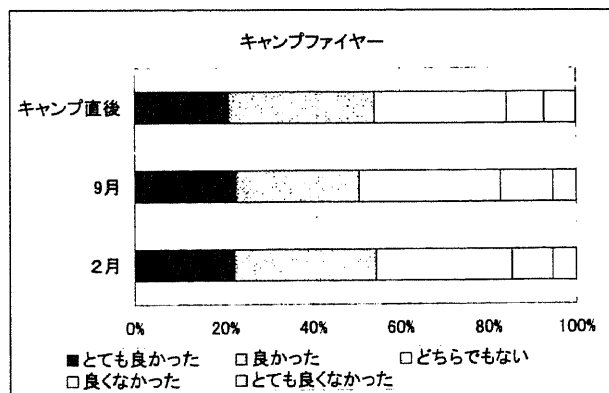


図5 アンケート結果⑤

アンケート結果⑤のキャンプファイヤーの満足度が、肉体的・精神的に負荷のかかった黒姫山登山直後に実施したにも関わらず、満足度が比較的高い。これは、教員主導のキャンプの楽しさを強調したキャンプファイヤーのプログラムを構成し実施したことやキャンプファイヤー直後に黒姫高原で見ることでできたホタルの印象が強く生徒に残っていることなどから満足度が比較的高くなったと考えられる。

5. おわりに

このチャレンジ・キャンプは、生徒に肉体的・精神的な負荷がかかることで、生徒に達成感・成就感を与え生徒の持つ不安や迷いを自信に変えることや生徒間の信頼関係を高めることを目的に実施した。

このキャンプの効果は、アンケート結果により、生徒の印象に残った体験であり、また、教員がこのキャンプに期待した効果についても将来的に十分に期待できることが確認された。

【引用文献・参考文献】

1. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第45集 (2007)
「第8回 コミュニケーション・キャンプ実践報告」
2. 堀出知里, 「キャンプで身に付く「コミュニケーション力」の評価方法を考える」, 日本野外教育学会第10回大会プログラム・研究発表抄録集, 2007, pp.44-45
3. 小林美智子, 「総合学科における入学直後のキャンプによる指導実践」, 日本野外教育学会第10回大会プログラム・研究発表抄録集, 2007, pp.64-65
4. 建元喜寿, 「入学直後の高校1年生に対する野外教育プログラムの評価」国立青少年教育振興機構研究紀要, 第8号 (2008年)
5. 信州自然大学校
<http://www.town.shinanomachi.nagano.jp/iyasino/mori/index.html>